



Title	『説得』におけるジェイン・オースティンの曖昧さ
Author(s)	川口, 能久
Citation	Osaka Literary Review. 1997, 35, p. 93-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『説得』における ジェイン・オースティンの曖昧さ

川口能久

I

She[Anne] had been forced into prudence in her youth, she learned romance as she grew older — the natural sequel of an unnatural beginning.¹

この文章は、『説得』の内容を端的にあらわしている。19歳のとき、アン・エリオットはフレデリック・ウェントワースと恋に落ち、婚約する。しかし彼女はラッセル令夫人に説きふせられて、婚約を解消する。彼女は「分別」(“prudence”)にしたがったのである。22歳のとき、アンはチャールズ・マスグローヴに求婚される。アンにとって、チャールズは、財産、社会的地位、性格、容貌、どの点から見ても申し分のない結婚相手である。ラッセル令夫人が二人の結婚を望んだのは当然と言えよう。27歳のとき、アンはラッセル令夫人にウィリアム・ウォルター・エリオット氏と結婚するよう説得される。彼はサー・ウォルター・エリオットの推定相続人であり、アンにとって彼と結婚することは、自分が“the future mistress of Kellinch, the future Lady Elliot” (p. 159) になることを意味している。結婚は愛情とは無関係であり、ひとつの社会的な契約である、² というのが18世紀の終わりから19世紀初頭にかけての支配的な結婚観であり、当時の紳士階級の女性にとっては、結婚するか、オールド・ミスとして家庭にとどまるか、あるいはガヴァネスまたは教師になるか、という三つの可能性しかなかった。³ このような当時の女性がおかれた状況や “she was only Anne.” (p. 5) という言葉に象徴されるように、アンがエリオット家で軽んじられていることを

考えれば、かりに真の愛情がなくとも、チャールズあるいはエリオット氏と結婚するのが「分別」というものであろう。だがアンは、ラッセル令夫人の説得にもかかわらず、どちらの男性とも結婚しようとはしない。ウェントワースと結婚できる保証などまったくないにもかかわらず、ひそやかな、しかしそれだけに激しいウェントワースに対する思いを持ちつづけていたからである。アンは社会的、経済的価値よりも個人の内面的な真実を重視したのであり、最終的にウェントワースと結婚することによって「ロマンス」(“romance”)を成就するのである。

以上のような内容からも明らかなように、『説得』においては分別とロマンスというふたつの価値観が対立している。⁴ 分別とは理性や社会的、経済的、伝統的価値を重視する立場であり、主にラッセル令夫人やサー・ウォルターのような古い階級に属する人々によって支持されている。それに対して、ロマンスは個人の感情、自発性、内面的真実を重視する立場であり、主にウェントワースのような個人の才能と努力によって財産や社会的地位を得ようとする新しい階級に属する人々によって支持されている。分別とロマンスの対立は、個人と社会の対立であり、古い階級と新しい階級の対立でもある。

アンがウェントワースと結婚することによってロマンスを成就するというストーリー、「不変の愛」(“constancy”)をめぐるアンとハーヴィルの激しい議論、変わらぬ愛を告白するウェントワースのアンへの手紙(第2巻第11章)、あるいはアンがエリオット氏の分別や慎重さよりも、要するにウェントワースの率直さ、感情の発露、情熱といったものを重視していること(p. 161)から判断する限り、『説得』においてオースティンは分別よりもロマンスを重視していると言えよう。

だが、不思議なことに、『説得』を全体としてとらえた場合、この小説からはその内容にふさわしい明るさ、あるいは激しい情熱といったものはあまり感じられない。それどころか、一種の歯がゆさ、あるいはヴァージニア・ウルフが指摘しているように、「独特の気だるさ」(“a peculiar dullness”)⁵ さえ感じられるのである。この小説はどうしてそのような印象

をあたえるのであろうか。本論ではこの小説がそのような印象をあたえる要因を指摘し、それがオースティンの曖昧さに起因することを明らかにしたい。

II

最初に指摘しなければならない要因は、『説得』には red-herring 的要素が多いことである。red-herring とは、本来キツネ狩りで猟犬の嗅覚を訓練するために用いられる燻製ニシンであり、根本の問題から注意をそらすためのもの、人を迷わせるもののことである。言うまでもなく、『説得』の主題はアンとウェントワースの結婚なのだが、その問題（キツネ）から読者の関心をそらすためのさまざまな red-herring が仕掛けられているのである。

第1章を検討してみたい。一般に第1章では小説の主題・内容が提示されることが多いのだが、『説得』では最初にサー・ウォルターの説明がなされている。そのあと故エリオット夫人、故エリオット夫人の友人であるラッセル令夫人の説明がつづく。そしてエリオット夫人の死後13年たった今もサー・ウォルターとラッセル令夫人は依然として隣人であり親しい友人であるが、二人とも結婚していないことが強調されているのである。ここまで読んできた読者が、『説得』はサー・ウォルターとラッセル令夫人が結婚する話だと考えても不思議ではない。むしろそう考えるのが自然であろう。

このあとエリザベス・エリオットのしかるべき結婚をサー・ウォルターが期待していること、29歳のエリザベスの美しさがそこなわれていないことが強調されている。そしてエリザベスとエリオット氏とのこれまでのいきさつ（エリザベスがエリオット氏にふられたこと）が述べられているのである。エリザベスがこの小説のヒロインではないのか、という印象を読者が受けても不思議ではない。

第1章において、アンについては、彼女がサー・ウォルターやエリザベスから軽視されていること、彼女の美しさが失われてしまっていること、そしてサー・ウォルターは彼女が結婚する希望などまったくもっていないことが

書かれているだけである。第1章を読む限り、アンは目立たない存在であり、彼女がヒロインだというのははっきりとした印象を読者が受けることはない。もちろん、『マンスフィールド・パーク』のファニー・プライスのように、弱い立場におかれた女性が、まさにそれゆえにヒロインになることは十分に有り得ることである。しかしファニーが小説の冒頭から他の登場人物の関心を集め、中心的な役割を果たすのに対して、アンがそのような役割を果たすことはない。

第1章以外にも、アンとウェントワースの関係から読者の注意をそらすための red-herring を見いだすことができる。たとえば、アップパークロスにおいて主な話題となるのは、ウェントワースはルイーザとヘンリエッタのどちらと結婚するののかという問題である。チャールズ・マスグローブ夫妻もクロフト夫妻もウェントワースがいずれかの女性と結婚することが望ましいと考えている。ヘンリエッタがチャールズ・ヘイターとよりを戻したあと、まわりの人間はウェントワースがルイーザと結婚することを当然のことと考え、ウェントワース自身もそうする義務があると考えられるようになる。

ライムにおいて読者の関心を集めるのは、アンとベンウィックの関係である。事情は異なるにせよ、二人はともに恋人を失い、文学に興味をもっている。彼らは文学について語り合い、ルイーザの怪我のあと、ベンウィックはことのほかアンに親切にする。そしてそのようなベンウィックにアンはますます好意を感じるのである。ライムでの事故を契機として、二人の関係が今後発展すると考えるのが自然であろう。

エリオット氏はまさに red-herring 的人物である。⁶ ライムで初めてアンと出会ったとき、エリオット氏は彼女に強い関心をしめず。バースでアンと再会したあと、彼は彼女に終始好意的な態度をとりつづける。そしてラッセル令夫人は、アンに彼と結婚するよう説得するのである。アンに彼と結婚する意志がなかったとしても、彼とアンの関係が大きなウエイトをしめていることは否定できない。彼はまた、彼がエリオット家との関係を修復しようとする目的において、あるいはスミス夫人によって暴露されることになる彼の

過去の行為において、読者の注意をひきつけているのである。

以上指摘したような red-herring 的要素のため、アンとウェントワースの関係そのものはなかなか前面にでてこない。実際、アンとウェントワースの過去を読者が知らされるのは第4章になってからである。アンとウェントワースが8年ぶりに再会するのは第7章の終わり近くになってからである。確かに二人は再会したあとたびたび顔を合わすが、二人の関係はフォーマルなものでしかない。二人が自分たちの関係について遠回しに言及することはあっても直接語り合うことはほとんどない。⁷ ウェントワースはライムでの事故のあと第2巻第7章まで小説の舞台を去る。最後からふたつ目の章になってようやくアンとウェントワースは、自分たちの気持ちを具体的な言葉で伝えあうのである。

オースティンの小説は、若い娘の結婚話であり、ハッピー・エンディングで終わっている。最初から結末は分かっているのであり、いま指摘した red-herring 的要素は読者の関心をつなぎとめるためのひとつの technique としての側面をもつことは否定できない。しかし、たとえば、『高慢と偏見』では、冒頭の場面でこの小説がベネット家の娘の結婚話に関するものであることがわかる。『マンスフィールド・パーク』ではサー・トーマスが、ファニーが息子のだれかと恋をするのではないかと心配することによって小説の内容が暗示されている。このようなことを考えると、オースティンは『説得』においてアンとウェントワースの結婚から読者の関心を意識的にそらそうとしていると言えるのではないだろうか。

『説得』が読者にある種のもどかしさ、歯がゆさをあたえる第二の要因は、アンが信頼できない語り手であることである。しばしば指摘されているように、『説得』の多くはアン視点から語られている。⁸ アンを観察や心理に重点がおかれ、読者はアン立場にたって小説を読むことになる。ところが語り手であり、観察者であり、読者が同一視しているアンに、しばしばウェントワースに関する情報が間接的にしかあたえられないのである。その結果、読者は少なくとも全知の語り手と同じようにアンを信頼できなくなるのであ

る。

具体的な例をいくつかしめそう。ほぼ8年ぶりにアンの前に姿を現すウェントワースに関する情報は、第6章においてはクロフト夫人の回想およびリチャードの手紙によって、第7章においてはマスグローヴ姉妹、マスグローヴ氏、チャールズ、メアリーによって間接的に伝えられる。アンが直接ウェントワースに会うわけではない。アンと再会したときのウェントワースの印象も間接的に伝えられる。ヘンリエッタがウェントワースにアンの印象を尋ね、そのときのウェントワースの言葉をメアリーがアンに伝えるのである。ルーザとベンウィックの婚約に関するウェントワースの考えも間接的に伝えられる。ウェントワースがクロフト夫人に手紙を書き、その手紙の内容をアンはクロフト夫人から聞くのである。

アンが信頼できない語り手であるもうひとつの理由は、アンが語り手（観察者）であると同時に恋の当事者であり、一方的にウェントワースとの婚約を解消したことに対して負い目をもっていることである。アンは中立的な語り手ではない。とりわけウェントワースに関してアンが偏ったものの見方をし、その判断が不正確になることは避けられない。もちろんアンが正しい判断をすることもある。漠然とではあるが、アンがエリオット氏の本質を見抜いていたことはその好例である。しかし正しい判断をすることもあるがゆえに、読者は一層間違った判断に惑わされることになるのである。

アンがウェントワースをいかに意識しているかは、たとえば、第6章におけるクロフト夫妻との会話からもうかがわれる。アンはクロフト夫人の顔つき、声、表情にウェントワースとの類似点を認めようとし、クロフト夫人がエドワードのことを話しているにもかかわらず、アンは、したがって読者も、ウェントワースのことを話しているのではないかと思ってしまう。

アンとの再会についてウェントワースは無関心か、あるいは気がすすまないのに違いないとアンは推測する。朝食の場所としてウェントワースがアンのいるコテージよりもグレイト・ハウスを選んだのは自分を避けるためであり、ウェントワースに対する自分の魅力は永久になくなったとアンは考える。

しかし第7章の最後で明らかにされるように、アンは依然として有力な結婚相手の一人なのである。アンへの手紙のなかで告白するように、ウェントワースはアン以外の女性を愛したことはなく、決して心がわりをしたことなどないのである。ウェントワースがアンとの再会に無関心であったり気がすまないはずはない。ウェントワースがコテージよりもグレイト・ハウスを選んだのは、単に子供が怪我をして困っているメアリーの邪魔にならないようにするためだけだったのかもしれない。アンを避けるためだと決めつけることはできないのである。

第8章の舞踏会でアンはウェントワースの視線を感じ、彼が「彼女の変わり果てた容貌」をながめ、「かつて彼を魅了した顔の残骸」を探ろうとしているのだと考えるが、これもアンの思い過ごしとは言えないであろうか。このあとウェントワースは、アンにいかにもわざとらしい礼儀正しい態度をとる。アンにとってそのような「彼の冷たい丁寧さ、堅苦しい優雅さ」(p. 72)は何よりも嫌なものなのだが、ここでもアンは誤解をしている。ウェントワースは、一方的に婚約を破棄されたにもかかわらず、アンに関心をもっていているからこそ、自分の本当の気持ちを隠すためにわざとよそよそしい態度をとっているのである。

すでに見たように『説得』においては分別とロマンスが対立している。アンとウェントワースの結婚を成就しようとする力の方向と大きさをロマンスのベクトル、逆に二人の結婚を阻止しようとする力の方向と大きさを分別のベクトルと呼ぶことにする。アンとウェントワースの関係が中心的な話題とならない要因として red-herring 的要素とアンが信頼できない語り手であることを指摘したが、見方を変えれば、これらの要因は分別のベクトルに他ならない。どちらの要因もアンとウェントワースの結婚の可能性を否定するように機能している。

一方、ロマンスのベクトルに属するものとしては、ウェントワースがウォルターにくっつかれて困っているアンを助けたこと、ウィンスロップへの遠足でウェントワースが疲れたアンを馬車に乗せたこと、ウェントワースが

「確固たる性格のもつ普遍的な幸福と利点」(p. 116)を疑うことになるライムでの事故、ルーザとベンウィックの婚約、音楽会におけるアンとウェントワースの会話とウェントワースのエリオット氏への嫉妬、「長期間の婚約」「不確実な婚約」(pp. 230-231)に関するマスグローヴ夫人とクロフト夫人の話、そして「不変の愛」をめぐるアンとハーヴィルの議論などである。これらのことにアンとウェントワースが最終的に結婚することを考えあわせれば、分別のヴェクトルよりロマンスのヴェクトルの方が大きいとも言える。

分別のヴェクトルは、しかし、ロマンスのヴェクトルに匹敵するか、むしろそれ以上の大きさをもっている。分別のヴェクトルに属する要素が比較的長期間にわたる人間関係や視点であるのに対して、ロマンスのヴェクトルに属する要素の多くは比較的短期間の、一時的な行為でしかない。それらが量的に分別のヴェクトルの要因を越えることはない。アンとウェントワースの関係が前面にでず、『説得』がもどかしさ、「独特の気だるさ」をあたえるのはこのためである。

『説得』におけるもっともロマンティックな場面は、「不変の愛」をめぐるアンがハーヴィルと議論する場面である。ここでアンは、キャンセルされた草稿の場合よりも、はるかに激しく自らの思いを吐露している。アンの「わたしが女性のために主張する特権は——それは羨むべきものではありませんし、あなたが欲しがったりする必要もないのですが——相手の方がいなくなっても、愛し合える希望がなくなっても、いつまでも愛しつづけることなのです」(p. 235)という言葉は、おおよそオースティンらしからぬ赤裸々な感情の表明である。このような言葉を聞いて、ウェントワースがだまっていられなくなるのは当然であろう。

問題は二人の議論をウェントワースが聞いていることをアンが知っていたかどうか、つまりウェントワースが聞いていることを知ったうえで、あのような主張をしたかどうか、ということである。

“We shall never agree upon this question”— Captain Harville

was beginning to say, when a slight noise called their attention to Captain Wentworth's hitherto perfectly quiet division of the room. It was nothing more than that his pen had fallen down, *but Anne was startled at finding him nearer than she had supposed, and half inclined to suspect that the pen had only fallen, because he had been occupied by them, striving to catch sounds, which yet she did not think he could have caught.* (Italics mine.)

(pp. 233-234.)

この一節を読む限り、少なくともウェントワースのペンが落ちる音を聞くまで、アンはウェントワースが彼女とハーヴィルとの話を聞いていたことを知らなかったことになる。ペンが落ちる音を聞いたあと、ウェントワースが二人の話を聞いているのをアンが知っていたかどうか、断定はできない。しかしウェントワースが聞いていることを知っていたら、一般論の形をとっているにせよ、ウェントワースの愛を確信できないアンに、あれほど激しく愛情を表明することができただろうか。⁹ わたしにはそうは思われぬ。かりに知っていたとしても、アンはあくまでウェントワースではなくハーヴィルに話しかけているのである。アンの言葉は直接ウェントワースに向かって発せられたものではない。決定稿において、オースティンは以上のような形でアンにウェントワースに対する愛情を表明させているのである。このことは何を意味しているのであろうか。

キャンセルされた草稿において、アンは直接ウェントワースにエリオット氏との結婚を否定し、言葉には出さないが、表情によって直接自らの愛情をウェントワースに伝えている。決定稿と比べて激しさはないが、アンは自分の意志で、直接ウェントワースに伝えているのである。この点で決定稿は決定的に異なる。確かにアンは男性より女性の方が constant であるという一般論の形でウェントワースに対する変わらぬ愛を表明するのだが、ハーヴィルと議論を始めたとき、アンに自己の愛情をウェントワースに直接伝え、成就させようという明確な意志があったわけではない。ウェントワースのペン

が落ちるのを聞いたあとでも、ウェントワースが聞いているのを知っていたかどうか断定はできないが、少なくともアンはウェントワースに直接語りかけているのではない。つまりアンの強い意志によって、二人が最終的に結ばれたのではない。この点においてもロマンスのベクトルは弱められているのである。

分別かロマンスかという問題は、ラッセル令夫人の説得をアンがどう評価するかという問題に帰着する。アンとウェントワースが婚約したとき、アンはまだ19歳であった。ウェントワースには財産もなければ縁故者もなく、海軍軍人としての不安がつきまっていた。ラッセル令夫人にしてみれば、ウェントワースの「自信」「楽天的な気質」「恐れを知らない精神」(p. 27)は危険な兆候でしかなかった。相思相愛であったとしても、後見人であるラッセル令夫人がウェントワースとの結婚に反対したのは当然のことであった。

分別の立場からすれば、ラッセル令夫人の判断が間違っていたとは言えない。実際、ウェントワースが軍人として成功をおさめ、財産を作ることができたのは、彼がアस्प号に乗り込んでいたとき、いくつかの幸運に恵まれたからに他ならない。プリマスに到着するのが24時間遅れ、サウンド号に乗り移っていなければ、彼は強風のために死んでいたのである。

アンは婚約を解消することは何よりもウェントワース自身のためになると考えていたのだが、27歳になったアンは当時とは異なった考え方をしている。

She did not blame Lady Russel, she did not blame herself for having been guided by her; but she felt that were any young person, in similar circumstances, to apply to her for counsel, they would never receive any of such certain immediate wretchedness, such uncertain future good. — She was persuaded that under every disadvantage of disapprobation at home, and every anxiety attending his profession, all their probable fears, delays and disappointments, she should yet have been a happier woman in maintaining the engagement, than she had been in the sacrifice of it. . . . (Italics mine.) (p. 29)

要するにアンは結果のいかに拘らず結婚すべきであったと考えているのであり、説得に応じたこと、つまり分別にしたがったことを後悔している。27歳のアンは分別よりもロマンスを重視しているのである。

ところが小説の最後の場面で、アンのラッセル令夫人の説得や説得に応じたことに対する考え方は変化する。

“I have been thinking over the past, and trying impartially to judge of the right and wrong, I mean with regard to myself; and I must believe that I was right, much as I suffered from it, that I was perfectly right in being guided by the friend whom you will love better than you do now. . . . But I mean, that I was right in submitting to her, and that if I had done otherwise, I should have suffered more in continuing the engagement than I did even in giving it up, because I should have suffered in my conscience.”

(p. 246)

ここでアンはラッセル令夫人の説得に応じたことをむしろ肯定しているのである。アンばかりではない。ウェントワースもやがてラッセル令夫人を許せるようになると言い、ラッセル令夫人以上に自分自身が敵であったこと、つまり自分があまりにも高慢であったことを認めるのである。結局、アンもウェントワースも分別の意義を認めているのである。

アンのラッセル令夫人の説得に対する態度は明らかに矛盾しているが、それは、結局、分別かロマンスか、という問題に対するオースティンの態度が曖昧だからである。このような曖昧さは、最終章冒頭のつぎの一節に端的にあらわれている。

When any two young people take it into their heads to marry, they are pretty sure by perseverance to carry their point, be they ever so poor, or ever so imprudent, or ever so little likely to be necessary to each other's ultimate comfort. *This may be bad morality to conclude with, but I believe it to be truth.*

(Italics mine.) (p. 248)

引用文中の“I”は語り手であり、作者自身の率直な意見と考えると差し支えないと思われる。若い二人が結婚しようと決心すれば、どんなに貧しくても、どんなに無分別でも、どんなにおたがいの幸福にとって必要でなさそうでも結婚できるものだが、これは物語の終わりにもってくるには悪い結論である。この部分は分別の立場に立っている。しかしそれが真実であると信じる、という部分はロマンスの立場に立っている。結局『説得』においては、分別のベクトルとロマンスのベクトルが拮抗し、微妙な均衡を保っているのである。このことは *Persuasion* の邦訳として分別に重点をおいた『説きふせられて』とロマンスに重点をおいた『説得』というふたつの邦訳が共存していることから明らかであろう。¹⁰

繰り返し指摘されているように、『説得』にはオースティンのこれまでの小説には見られない新しさがあるが、¹¹ その新しさとは要するに分別に対するロマンスの優位ということに他ならない。事実『説得』においてアン・ロマンスは実現されているのであり、ストーリーのうえではロマンスが優位をしめているのである。

オースティンは、しかし、分別の立場を完全にすて、全面的にロマンスの立場にたったわけではない。すでに見たように、分別のベクトルはロマンスのベクトルと拮抗している。分別かロマンスかという問題に対する彼女の立場は曖昧なのだが、その根底にあるのは、人間（個人）は社会的存在でしかありえないというオースティンの現実認識である。このような曖昧さゆえに、オースティンはアンとウェントワースの結婚、つまりロマンスの分別に対する優位という問題を正面から取り上げることをためらい、ストーリーのうえではロマンスが優位をしめる『説得』において red-herring を仕掛け、アンを信頼できない語り手とすることによってロマンスのベクトルを弱めようとしたのである。

注

本稿は、日本英文学会中国四国支部第48回大会（1995年10月28日、山口大学）における口頭発表にもとづく。

- 1 Jane Austen, *Northanger Abbey and Persuasion*, 3rd ed., edited by R. W. Chapman (London: Oxford Univ. Press, 1933), p. 30. 『説得』からの引用はこの版により、ページ数を記す。
- 2 B. C. Southam, *Jane Austen* (Harlow: Longman, 1975), p. 35.
- 3 Douglas Bush, *Jane Austen* (New York: Collier Books, 1975), p. 7.
- 4 Andrew H. Wright, *Jane Austen's Novels: A Study of Structure* (London: Chatto & Windus, 1953), p. 35, p. 161; 青木 剛「生活実践としての自立—フェミニズムの底流」『イギリス近代小説の誕生—十八世紀とジェイン・オースティン』都留信夫（編著）（ミネルヴァ書房, 1995), pp. 284-286 参照。
- 5 Virginia Woolf, "Jane Austen," in *Jane Austen: A Collection of Critical Essays*, ed. Ian Watt (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1963), p. 22.
- 6 See Wright, p. 163, p. 169.
- 7 Bush はウェントワースが小説の最後でアンに自らの思いを激しく訴えるまで2000語余りしかしゃべらず、そのうちの3分の2はアンに語りかけたものではないことを指摘している。Bush, p. 169.
- 8 See Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: The University of Chicago Press, 1961), pp. 250-251; Mary Lascelles, *Jane Austen and Her Art* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1939), p. 205; Laurence Lerner, *The Truth-tellers* (London: Chatto & Windus, 1967), p. 170.
- 9 コンヴェンションによって、女性は相手の男性の愛情が確信できるまえに女性の方から愛情をほのめかすことさえできず、控えめなアンはこのコンヴェンションを無視することはできなかった。John Lauber, *Jane Austen* (New York: Twayne Publishers, 1993), p. 103.
- 10 吉田安雄『イギリス小説研究—テキストの注釈と主題の解明』（研究社, 1994), p. 61 参照。
- 11 See Margaret Kennedy, *Jane Austen*, 2nd ed. (London: Arthur Barker, 1966). p. 85; Lauber, p. 95; Woolf, p. 22; Lerner, p. 171.